
人外と盲目の少女～出会い～

ティシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人外と盲目の少女く出会いく

【Nコード】

N0056Y

【作者名】

ティシー

【あらすじ】

誇りを失った獣は、今日も陽を避けひっそりと暮らす。そこへ突然小さく、だが眩しい程の光を持った少女が現れた。盲目の無邪気な少女と人間にトラウマを持つ人外のお話。

（前書き）

無邪気な少女に戸惑う人外がかきたかったんです。

すいません最初の部分を変えました。読み返してみたら設定おかしかったですね。

いつもの様に太陽を避けて生活していたオレに、ある日突然、小さくて大きな光が舞い込んだ――

「……」

「誰がいるの？」

「ウウウ」

「だあれ？」

ここは森の中にある洞窟。オレの寢床だ。

一番奥で眠っていたオレだが、気配を感じて目を覚ました。そのあまりに無防備な気配に不審がって覗いて見れば、そこにいたのはニンゲンの少女。

こんな所に何の用だ？

いやそれより、オレを見てなんとも思わないのか？

オレの種族は美角獣^{ウエルシーバ}。個体によって形が違う立派な角と、長くフ

ワフワな尾と丈夫な身体が特徴だ。

普段は二足歩行で、手より足の筋肉が発達している。

森で生活していた当時、幼かったオレは仲間の言いつけを破り、森の外へと飛び出した。それが悪夢の始まりだった。

ハンターに捕らえられたオレは、大人になるまでの数年間はペットとして単に可愛がられていた。

その頃はニンゲンに対して何の恐怖もなく、その家の子供とも遊んでいた。

しかし成獣となり数か月経った頃、ある日突然両手足を縛られ子供の泣き叫ぶ声を聞きながら、トラックに乗せられた。

そこで急激に眠くなり、気付いた頃には、角があったはずのそこからは激痛しかなかった。

それから奴隷の日々。奴隷はオレの他にも色々な種族がいた。ニンゲンもだ。

あの光が、何度オレを極限まで追いやってただろう。真夏の太陽の光が降り注ぐ猛暑の中、ムチを打たれながら働かされた。いくら丈夫なオレでも、休みなくこき使われて何度も意識が飛んだ。

その度に無理矢理意識を戻され、カラダとココロの傷が増えていった。

死にもの狂いでなんとか逃げ出したが、太陽の光を浴びていると吐き気がするようになっていた。

だから日中は洞窟で過ごし、夜に行動するようにしている。

もう一つ日中に外に出たくない理由は、同じ種族ウエルシーバに出会いたくないからだ。

誇りである角は削ぎ取られ、二本あるはずの長いフサフサの尾は一本しかない。

固まっていたオレに痺れをきらしたのかよたよたと近づいて来た少女に、低い唸り声を上げる。

「何？ うーん……どこ？」

何かを探るように空中を彷徨う少女の両手。

その手が段々と近づいて来て、自然と尾が下がり、動けなくなる。

「あつ。わぁ……ふわふわ！」

ついに少女の手はオレの顔に達し、ゆっくりと首へと移動していた。

「わんちゃんみたい。……うん？ どうしたの？ なんでふるえるの？」

「ウルル……」

少女が触れると、過去のニンゲンとの記憶が蘇り、身体が勝手に震えだす。

なんとか唸り声を絞り出すのが精一杯だった。

「なんで？ こわいの？ だいじょうぶだよ」

「ウウウ……ウオウ！ グルアアッ」

やっとまともに出せるようになった声を少女に発す。

少女は少しビクツとしたが、直後、オレをゆっくりと体全体で包み込んだ。

「だいじょうぶだよ。こわくないよ。だから……あの、美夜とお友達になっ——」

少女が言い終わる前に、オレはニンゲンを突き飛ばし、洞窟を飛び出した。

普段は二足歩行のウェルシーバだが、緊急時は四足走行になる。

日光を長く浴びる前に、日陰に入り、日避ける。

たいした距離を走ってもないのに、息が乱れていた。

しばらく日陰を移動し、夜が来るのをただひたすら静かに待った。

夜になり、天敵の太陽が姿を隠すと、重い腰を上げて川へ向かった。

ポチャリと冷たい水が足を濡らす。

そのまま全身を浸からせると顔も沈ませ周りを見渡す。大きな獲物も見つからず、食欲もそれほどなかったために水浴びだけすると、水中を出た。

プルプルと体を震わせ水を飛ばしながらさきほどのことを考える。

もう帰っているだろう……。

まだ幼いみたいだったが、何故こんな森に一人でいたんだろうか。

洞窟に戻ってくると気配が一つ。まさか……

「！」

少女は丸まって寝ていた。その体は微かに震えていて寒いようだった。

「……」

しばらく立ち竦む。

冷静になった頭は幼少期の記憶を呼び出していた。奴隷にされる前、ニンゲンの子供と遊んでいた記憶を。最後に、オレの名前を呼びながら泣き叫んでいた子供の姿を。

あの子供の親は最初からオレを売る目的だったんだろうが、子供は恐らく知らなかったんだろう。

この少女に罪はない……。

わかっていても動けなかった。

どれだけの間、少女を眺めていたんだろうか。記憶が駆け巡り、感覚がなかった。

しかしふいに、少女が発した寝言で我に返った。

「や……いか……いで」

ハッと覚醒する頭。少女の寝言は続く。

「いや……」

「……」

「ま……ぱ……」

「……」

「おいて……… いかないで……」

「……っ」

無意識に足が少女の元へ向かう。

傍らに座り寄り添うと、涙の痕を一舐めする。すると少女が擦り寄ってきて毛を軽く掴む。

安心したように眠る少女。寝言はなくなっていた。

さてどうしたものか。信用したわけでもないし、もしかしたら少女を探しにニンゲンが来るかもしれない。緊張で寝るに寝れない。

結局、その夜は寝ずに朝を迎えた。

「うん……」

少女が身じろぎして目を擦る。

「ん？ なぁに？ ふわふわ……」

オレの毛皮に気付いて両手を伸ばして確かめるような仕草をする。

この少女……………。

「グル……………」

「あつ。きのうのわんちゃんっ?」

犬ではないんだがな。それは姿を見ればわかるはず。
やはりこの少女、目が見えていない?

「きのうはごめんなさい……………。美夜、わるい子だった?」

意味はよくわからなかったが、怒ってはいないとその頬を舐めた。

「わつ。ゆるしてくれるの? わんちゃん優しいね」

「ウル……………」

嬉しそうに笑顔を向ける少女に、もうオレの体は拒絶しなかった。

それから、オレと少女の奇妙な生活が始まった。

当初、少女を探しに現れるだろうと思っていたニンゲンは一向に姿を見せず、すでに一週間が経過していた。

少女は好奇心旺盛で、目が見えないはずだが構わず興味を持った
ら確かめに行く。

オレの方がヒヤヒヤして神経を注いでいる。そのためか、太陽を
浴びていても吐き気も奴隷の時を思い出すことも、いつの間にな
くなっていた。

「わんちゃん見てー。これなあに？」
「グルウ」

オレの言葉は理解出来ないだろうが、返事が返ってくるだけでいいらしい。

「これは？ あ、チクってした！」
「グルルツ」

少女の手を見ると、柔らかな肌から薄らと血が見えた。
オロオロとするオレに対しキヤハキヤハと笑っている少女。何故だ。

「グウル」
「なあに？」

少女の手を取って口に含む。

「うふふつ。わんちゃんくすぐつたいよ」
「ウウルル」

手を離すと、血は止まっていた。

「美夜の手であそぶのやめたの？ じゃああっち行こ！」

遊んでいたわけじゃないんだが。あっちあっちと言いながらご機嫌で歩いて行く少女。

ん？ あっち？

「グオル！」

待て！ そっちは段差が！

「きやははっ」

何が楽しいのか走り出す少女。慌てて追いかけて少女の襟を掴む。

「グルウッ」

「なんで！」

「ルルル」

暴れる少女を宥めて手を段差に誘導する。

「あっこれ？ わんちゃんイイ子だね」

「グル」

「ありがと！」

「……ウルル」

少女には恐怖がないのだろうか。

見えない、それだけで普通は恐いはずだが。

しかし本当に、何故少女は一人でこんな森にいたんだろうか。

……………捨てられた？

木に身を預けながら考える。

まさかな……。だが事実、ニンゲンは迎えに来ない。場所の特定が出来ていないだけかもしれないが。

「きゃあー！」

突然聞こえた悲鳴に瞬時に振り向くと、少女が先程の段差に上
ろうとして足を引っかけた所だった。

「ミヨー!」

咄嗟に叫んで駆けつけるが、間に合わずに少女の体は地面へ倒れ
ていた。

「うゝ」

むくつと起き上がり、額に手を当てて唸る少女。膝からは血が出
ていた。

「グルグルウ」

痛いだろうと心配して鳴けば……

「わんちゃん!」

ハッとしたように額から手を離し、目を見開く少女。

「さっき『美夜』って!」

「……」

「しゃべれるようになったの!」

「……」

「もういっかい言って!」

「……グル」

話せるのは随分昔からだ。ニンゲンに飼われていた頃に言葉を覚

えた。本能的にニンゲンの前でしゃべることはしなかったが。

「わんちゃん！」

「……犬デハナイ」

久々に発した言葉は、スムーズにいかずカタコトになる。
少女はオレの言葉を聞くと満面の笑みを浮かべた。

「しゃべったあ！」

こちらに手を伸ばす。が、

「イタッ」

驚きに忘れていた痛みが戻ったらしい。オレも忘れていた。

「グルルル」

膝に顔を近づけて舌を伸ばす。ペロリと舐めると広がる血の味。

「ひゃっ」

痛かったらしい。オレの顔を小さな両手で押し返してきた。

「……ガマン、シロ。スグ終ワル」

「うん！」

オレがしゃべるのはかなり嬉しいみたいだ。

何度か舐めていると血が止まる。その間、少女はオレの頭を熱心

に撫でていた。いや触っていた？

「ふわふわ」

とか呟きながら。

「終ワッタ」

スッと顔を離すと、それに伴い遠ざかる少女の手。

「わぁ！ 痛くないよ！」

「グル」

「ありがとわんちゃん！」

再度言おう。

「……犬デハナイ」

「じゃあなあに？」

「ウエルシーバ」

「うえる……？ それがわんちゃんの名前？」

「種族ダ。名前デハナイ」

「しゅぞく？ 名前はなんて言うの？」

「……ワスレタ」

すると目の前の少女は首を傾けて考えこむ。

「じゃあね。うん……」

「……今ノママデイイ。呼ビヤスイヨウニ呼ベ」

「うん、そうする！」

思いつかないらしい少女に助け舟。

それから更に「ご機嫌になった少女はまたトタトタと歩き出す。

「待テ」

「なあにわんちゃん！」

「尾ヲ持テ」

「うん？」

わかっていない少女の左手に己のしっぽを近づける。

「あ、フワフワ」

「持ッテイロ」

「いいの？」

「グル」

尾を持たれても痛くはないし、これで先に行かれる心配もない。
障害物があっても対処しやすい。

まあ、少女がちゃんと持っていればの話だが。

「ふわふわ〜」

毛のフワフワ感が気にいったらしい。

やたらと振り回すのはやめて欲しいが、我慢するでしょう。

「ねえわんちゃんっ」

「ルルル」

「わんちゃんは、美夜のお友達？」

ピタリと歩みを止める少女。
トモダチ……

「……ソーダナ」
「ほんとう！？ 美夜すごくうれしい！ わんちゃんディスク」
「……ゲル」

素直に喜ぶ少女から目を逸らす。別に恥ずかしくなったわけではないぞ。断じて。

そう……少女の笑顔が少し眩しかったただけだ――。

それからまた数日が経ち、オレと少女は今日も森を散歩する。

いつまで、この穏やかな時が続くんだろうか。

もしかしたらニンゲンが迎えに来るかもしれない。
だが、その時まで――

「わんちゃん！ 今日もおひさまがんばってるねっ」

「ルル……」

空に手を伸ばす少女。その手が太陽に届くことはないが、オレの心には少女の光が確かに届いた。

——その時まで、この小さくて大きな光を大切にしよう

（後書き）

第一弾です。いや続き書くかはわからないですけど。浮かんではい
ます。

ほのぼのいきたいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0056y/>

人外と盲目の少女～出会い～

2011年11月12日21時55分発行